

10月28日 逍遙



振り返ったワタシの顔に滲む秋色の夕陽が、御楼門の重厚な趣を一際鮮やかなシルエットで浮かび上がらせています。そして、その鮮やかさが何故か懐かしく感じられるのは、147年ぶりに蘇ったその城門の向こうに、カオスな今を生きる人間達が探し求める何かを隠しているからなのかもしれません。

逍遙館長さんの話では、「鹿児島城内の理化学実験施設で、反射炉のミニチュア製作等から始めた斉彬のリーダーシップと産業振興」「鹿児島城滞在ののち、將軍の正室となった篤姫のような、幕府や朝廷とのネットワーク」「鹿児島城を本城としつつ、高い比率の武士を独自の外城制度に組み込み、郷中教育等による人材育成と併せて築いた、強固なガバナンス」「御楼門から入城した琉球王子を始め、琉球等を通じた独自の海外情報収集・分析力」そして「この御楼門も被弾した薩英戦争や、御楼門部周辺の石垣に今も無数の弾痕を遺す西南戦争」などの様々な証言が、この御楼門の向こうに…

来週は、猫のワタシにとっての「向こう」を、散歩がてら訪ねてみようかな。

次回「「共に生きる」とは、のこころ」

懐かしさの向こうには、

ガバナンス

